

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

# 敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0028号  
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年8月20日

## 小泉首相靖国参拝！失われた21年は取り戻せるか？

海行者美都久屍 山行者草弁須屍 大皇乃 敝尔許曾死米 可敝里見波勢自

東京の片隅から東の空を望めば、雲の波間から微かに差し込む一条の光。時は皇紀2666年8月15日早曉、辺りで鳴く蝉の声は、これから聞くであろう九段の杜のそれとは似て非なるものである。動乱の時代に生きた61年前の人々を偲び、朝食に水団を食した。六根を清浄するために風呂に入って「海行かば」を口ずさんだ。願わくは、豊葦原瑞穂國を靖国に眠る神々が見捨て賜わぬことを。



靖国神社を参拝する首相

地下鉄を降りて九段の坂を上り始めた頃、靖国に向かう人々に何かを訴えるかの如く葉月の雨が降り注ぐ。7時20分、あの男がやってくるのを信じて北門に立つ。待つこと20分、3台の車とともに内閣総理大臣・小泉純一郎はやって来た。モーニングに身を包んだ首相は「内閣総理大臣小泉純一郎」と記載し本殿に昇り参拝した。しかし、それは私人を装うかのようにポケットマネーから玉串料を奉納し、政教分離の批判を避けるかのように神道形式に則らない一礼だけの参拝であった。首相がこの特別な日に参拝したことには一応の評価はすべきであると思うが、降ったり晴れたりしたこの日の天気のように、何ともはっきりしない参拝であった。降り続いた雨も首相が帰るとおさまり、蝉時雨だけが残った。この雨は長い間待ち望んだこの日に首相が参拝したことへの英霊の嬉し涙であったのか、はたまた5年間、騙し続けられた怨みの涙であったのか、私には知る術もない。これまで、首相の言動と政策に関して言いたい放題批判してきた。郵政民営化に代表されるそのいくつかは今でもおかしいと思っている。しかし、これらは試行錯誤の世界であり、これからどうにでもなることだ。異論反論を承知で言わせて戴くが、国家の精神の世界において、本日小泉純一郎は、曲がりなりにも公約を果たしたのである。惜しむらくは5年前の参拝から、この特別な日に昇殿参拝をするべきであったが、諸霊が命をもって護りし大和島根と大和民族の誇りは、辛うじて維持されたとと言えるのではないだろうか。

日本の現役首相が靖国神社を参拝したのは、昭和60年当時の中曽根首相以来実に21年ぶりの事である。この21年の間に、日本人は誇りや自尊心を失い、支那や韓国に対して土下座と謝罪の外交を続けてきた。しかし今日の首相の参拝によって、それらに終止符を打つ気運が高まったと言えるのではないだろうか。気運の高まりは、26万8千人という過去最高の人々が参拝したことからも窺える。中でも若者たちの姿が多く見受けられたことに、私は無類の頼もしさを覚え、この数年間で日本に「若者たちの愛国心」が着実に育ってきていることに無上の喜びを感じた。国を憂える若者たちの存在に、愛国心を悪とする戦後社会を肯定してきたメディアや自称文化人たちは慌てふためいた。既存のメディアの偏向した情報に疑問を持った若者たちは、いつの間にか砂浜に水が沁み込むように、ネットを通して正しい歴史認識を身につけていたのである。インターネットで愛国の雄叫びをあげる若い憂国の志士たちは、やがて国家の大きな財産となり、失われた21年間を取り戻す原動力となることであろう。

午前11時過ぎ、開門前から陣を構えていた本隊と合流し、拝殿へと向かう。昨年同様、神門の前は老若男女でごった返していた。戦死された息子さんに会いに来たのであろうかやっとの思いで歩く老婆、「靖国で会おう」との約束を果たす為に戦友に会いに来た老人、数人のグループで参拝に来ている自衛隊員、茶髪の若者たち、子供の手を引く若い夫婦・・・様々な善男善女が、降り続く小糠雨とその合間を縫うように照りつける灼熱の太陽の下、一人一人が思いを秘めて肅々と拝殿へと歩を進める。聞こえてくるのは都会の喧騒と、時折上空を飛び交うヘリコプターの音と、蝉時雨だけである。午前11時45分例年のように拝殿右横に整列してその時を待つ。正午の時報を合図に境内を埋め尽くした数万の参拝者の心が一つになり、

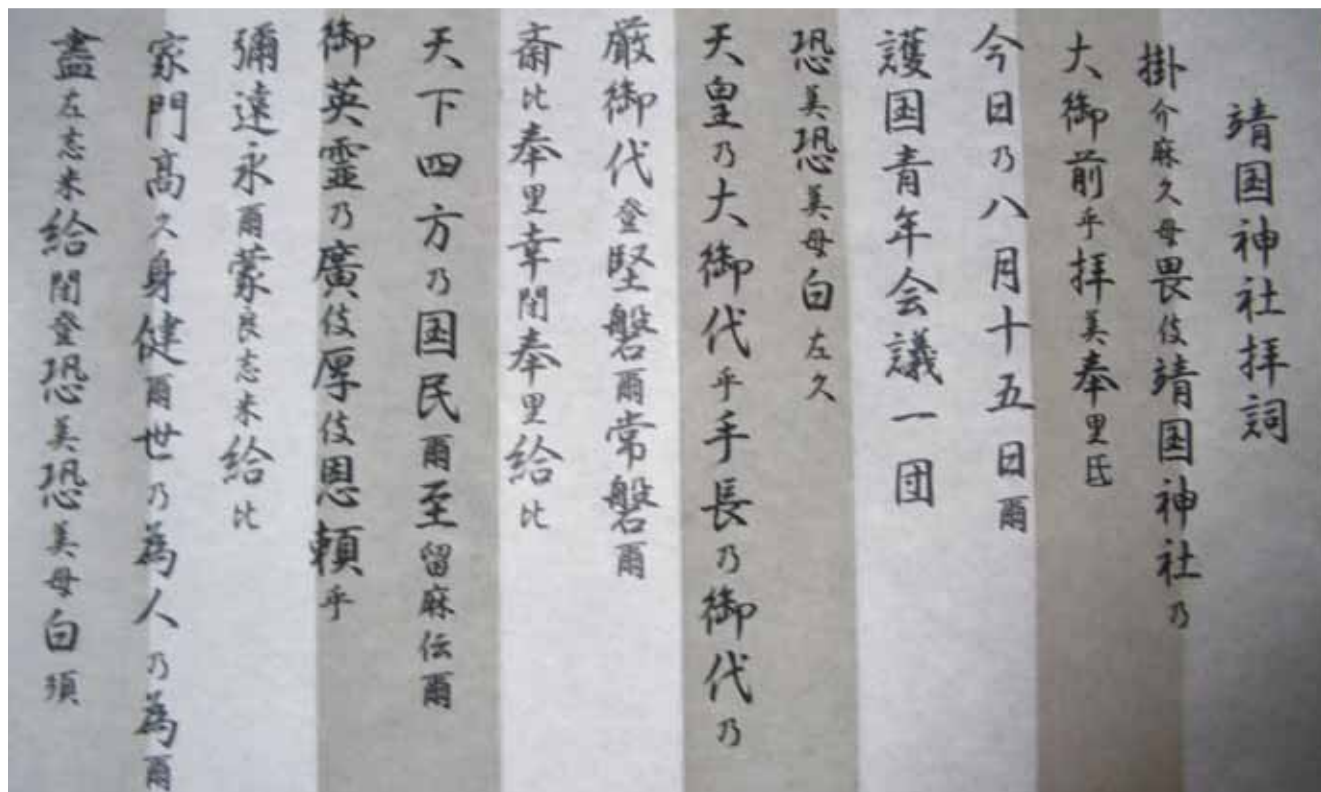


境内を埋め尽くす参拝者

英霊に黙禱を捧げる。辺りを静寂だけが流れる異空間の中、目を瞑れば、さまざまな思いが去来し、英霊の声が聞こえる「長い間待ったが、今日我々の想いが多少報われたようだ。次の総理も、その次の総理も8月15日に我々に会いに来てくれる事を願う。我々は此処を離れるわけにはいかない、靖国は我々の、そして日本人の心の故郷なのだから・・・」と。私は誓う「いくら皆様方を想い尽くしても、皆様方から受けた御恩には到底及びません。本日首相が馳せ参じましたように、また憂国の志を抱いた多くの若者たちが哀悼の誠を捧げましたように、日本は確実に変わってきております。近い将来、今上陛下の御親拝が叶いますよう日々精進致します」と。鳥居の下で、拝殿の前で、頭を垂れる人々がいた。凜とした静寂が木々の木陰からも感じられる8月15日の靖国であった。

平成18年8月15日 編集人//戸出蒼流

## 【靖国神社拝詞・護国青年會議】



か かしこ おおみまえ おるが まつ  
 掛けまくも 畏き靖国神社の 大御前を 拝み奉りて

今日の8月15日に 護国青年會議の 一団 かしこ 恐み恐みも白さく

すめらみこと おおみよ たなが いかしみよ かきわ ときわ いわ さきわ  
 天皇の大御代を手長の御代の 厳御代と堅磐に常磐に 斎い奉り 幸へ奉り給い

あめのしたよも くにたみ みたま ふゆ いやとおなが かがう  
 天下四方の国民に至るまでに 御英霊の廣き厚き 恩の頼を 彌遠永に 蒙らしめ給い

いえかど すこやか つく  
 家門高く身 健に世の為人の為に 盡さしめ給へと恐み恐みも白す

## 靖国神社を危機から護ろう！

編集部//秋山慎一郎

皇紀2666年8月15日、同志の一行とともに靖国神社を参拝した。信憑性の限りなく薄い怪しげなメモを取り上げ、様々なメディアの偏向した報道や左翼的世論が渦巻く中、不安定な天候にも関わらず、少年から年配者まで黙々と歩く様を見て、その人数の多さには流石に驚くとともに、日本人のあるべき姿というものを目の当たりにし、日本の将来に少なからぬ安堵の念を抱いた。しかし敢えて言わせて貰えば『平和ボケ』したこのご時勢に国民の大半は、先の戦争で命を差し出された御英霊が礎となり、今日の平和が齎されているという認識が薄く、感謝の念に欠けているように思われる。愛する人を残し、守るべき家族のために明るい未来を夢見て戦地に赴いた方々の心中を思うと言葉が見つからない。先達が心の拠り所とした靖国神社を、出撃の朝、靖国の社でまた逢おうと誓い合ったこの場所を、どうして無下に出来ようか。その御英霊に対し万人が感謝の意を伝えられる唯一の場所は靖国神社をおいて他にない。中韓にスタンスをおく政治家や偏向メディアは、戦勝国によってでっち上げられたA級戦犯の分祀や、無宗教の国立哀悼施設の建設を企んでいるが、嘗て靖国に眠る神々が国家存亡の危機に尊い命を捧げて国を護ったように、我々はこの愚かな構想を身を挺して瓦解し、中韓の内政干渉や獅子身中の虫を叩き潰して、陛下の御親拝の実現に努めるべきである。陛下の御親拝こそ御英霊が最も望むことであり、その実現が御恩に報いる唯一の道である。

皇紀2666年8月15日